

スペイン・エラスムス主義とオスマン帝国

——16世紀の二つの対話篇に焦点を当てて¹——

三 倉 康 博

(受付 2013年10月23日)

1. は じ め に

デシデリウス・エラスムス (Desiderius Erasmus, 1466/69–1536) の著作が神聖ローマ帝国皇帝カール5世 (在位1519–1556, スペイン国王カルロス1世としては在位1516–1556) 時代のスペイン文化・思想に大きな影響を与えたことは、マルセル・バタイヨンの記念碑的研究² いらい誰もが認めるところとなっている。エラスムスの宗教思想の根幹つまり「キリストの哲学」(philosophia Christi) に共鳴し、カトリック教会の腐敗を批判し改革を求めたスペインの知識人たちが、一般にエラスムス主義者と呼ばれている。しかし、キリスト教信仰のみならず政治・社会・哲学・教育など多岐にわたるエラスムスの思想のすべてを、スペインのエラスムス主義者たちが一様に受け入れたわけではない。エラスムスのオスマン帝国観は、スペインへの浸透が必ずしも容易でなかったものの一例である。16–17世紀はオスマン帝国の存在そして脅威がスペインの知識人全般に大きなインパクトを与えた時代であるが³、そうしたなかでスペインのエラスムス主義者たちがオスマン帝国に対してどのような見方を示したかという問題について、本稿では論じたい。

とは言え、スペインのあらゆるエラスムス主義作家たちのオスマン帝国観を網羅的に取り

1 本稿は第29回地中海学会大会 (2005年6月, 於静岡文化芸術大学) における口頭発表「スペイン・エラスムス主義とオスマン帝国——アルフォンソ・デ・バルデスと『トルコへの旅』——」に加筆修正を施したものである。

2 Marcel Bataillon, *Erasmus y España. Estudios sobre la historia espiritual del siglo XVI*, tr. Antonio Alatorre, México D. F.: FCE, 2ª ed. corregida y aumentada, 1966 (1ª ed. en francés, 1937; 1ª ed. en español, 1950). バタイヨン以後の研究で代表的なものを一つ挙げるとすれば, José Luis Abellán, *El erasmismo español*, Madrid: Espasa-Calpe, 3ª ed., 2005 (1ª ed., 1976) になろう。

3 16–17世紀のスペイン知識人がイスラーム世界をどのように認識しどのような言説を作り上げていたかについて総体的に論じた研究として, Albert Mas, *Les turcs dans la littérature espagnole du Siècle d'Or (recherches sur l'évolution d'un thème littéraire)*, 2vols., Paris: Centre de Recherches Hispaniques, 1967; Miguel Ángel de Bunes Ibarra, *La imagen de los musulmanes y del Norte de África en la España de los siglos XVI y XVII. Los caracteres de una hostilidad*, Madrid: CSIC, 1989 がある。前者は文学作品を、後者はフィクション性の低い年代記や記録文書それに宗教書を主な分析対象としているが、導き出した結論の多くは共通する。しかし本稿のような視点からの分析はおこなっていない。

上げて全体像を提示するだけの紙幅の余裕はないので、本稿では、オスマン帝国に関するエラスムス主義者たちの認識が多様であったことを示す重要かつ興味深い例として、二つの作品を取り上げる。一つは、1520年代から1530年代にかけてのスペイン・エラスムス主義最盛期⁴を代表する存在で、同時代人に「エラスムス以上にエラスムス的」とも評された⁵アルフォンソ・デ・バルデス（Alfonso de Valdés, 1490頃－1532）が1528年から1530年頃にかけて執筆した（初版は著者の死後、1530年代にイタリアで出版された）対話篇『メルクリウスとカロンの対話』（*Diálogo de Mercurio y Carón*）であり、もう一つは、1550年代後半に執筆された（ただし20世紀に入るまで刊行されなかった）作者不詳の対話篇で、スペイン・エラスムス主義文学末期の重要作品である『トルコへの旅』（*Viaje de Turquía*）である。それぞれにみられる対照的なオスマン帝国観を比較検討するとともに、その差異の背景について掘り下げて考えてみたい。

2. エラスムスのオスマン帝国観

最初に、エラスムス本人のオスマン帝国観を、先行研究に沿って簡単にまとめてみたい。彼はトルコ人に対するキリスト教徒の戦争を完全に否定することはなかったが、きわめて限定的に考えており、キリスト教徒は、まず自らの内面を清めキリスト教的模範性を回復したうえで、新約聖書の時代の使徒たちにならってトルコ人の平和的なキリスト教化に努めるべきであり、やむをえず彼らと戦争をする場合も、それはあくまで最後の手段であり、ヨーロッパの防衛とキリスト教布教のみを目的としなければならないと一貫して主張していた⁶。

エラスムスの文章を例証として挙げると、たとえば、1515年に上梓した、格言の説明という形式の『戦争は体験しない者にこそ快し』（*Dulce bellum inexpertis*）というエッセイのなかで、彼は次のように述べている。

私をして言わしめるなら、現今トルコ人に対して企てられている戦争でさえ、これを肯定してしまってはならぬ。[中略] トルコ人たちをキリストの膝下に帰依させようというなら、富や軍隊や強権をひけらかしてはいけない。むしろトルコ人たちが、私たちのなかにキリスト教徒という名称だけでなく、その確かなしるしをも認めるようにしなく

4 スペイン・エラスムス主義の最盛期は1527－1532年とされる（Abellán, *op.cit.*, p. 101）。

5 Bataillon, *op.cit.*, p. 231.

6 Maria Cytowska, “Erasmé et les turcs”, *Eos*, 62 (1974), pp. 311–321; Jean-Claude Margolin, “Erasmé et la guerre contre les turcs”, *Il pensiero politico*, 13 (1980), pp. 3–38; Norman Housley, “A Necessary Evil? Erasmus, the Crusade, and War against the Turks”, in John France and William G. Zajac (eds.), *The Crusades and Their Sources: Essays Presented to Bernard Hamilton*, Aldershot: Ashgate, 1998, pp. 259–279.

てはならない⁷。

私は何も、トルコ人が攻撃してきた場合にも絶対に戦争を起こしてはならぬ、とは言っていない。ただ、戦争をするなら、キリストの御名において、キリスト教の精神にそって、キリスト教徒としての武器をとって戦え、と言いたいのである。さらに、私たちが彼らを収奪するためではなく、彼らを救いに導くために戦っているのだ、ということをつトルコ人も理解するような具合に戦え、と言いたいのだ⁸。

1516年に出版した政治論『キリスト者の君主の教育』(*Institutio principis christiani*)では、次のように述べている。

思うに、トルコ人に対してでも軽率に戦争を仕掛けるべきではない。キリストが支配を普く広め確立したのは、それとは全く異なる方法に依ったためであることに、何よりもまず思い至らなければならないのである。キリストの教えが初めて伝えられた時と同じやり方でなければ、その教えを彼らに及ぼしても無益なのである。[中略] 信仰をめぐっての戦いだと言うのであれば、信仰が深められ輝きを増すのは殉教者の受難によってであって、軍隊の武力によってではない⁹。

さらに1517年に出版した『平和の訴え』(*Querela pacis*)においても、平和の神の口を借りて、次のように述べている。「トルコ人とても武力で攻撃するより、教化と親切と汚れない生活の実例を示すことによって、キリスト教に誘導すべきはもちろんですね」¹⁰。

オスマン軍によるウィーン包囲の翌年、1530年に上梓された『トルコ人に対しなされるべき戦争に関するきわめて有益な議論』(*Utilissima consultatio de bello Turcis inferendo*)でも、次のように言う。

もし我々が真に自分たちの首からトルコ人を取り除こうとするなら、我々はまず自分たちの心から、貪欲、野心、権力欲、自己満足、不信心、浪費、快樂への愛、詐欺、怒り、憎悪、ねたみといった、より忌まわしいトルコ人の種族を追放せねばならない。精

7 エラスムス「戦争は体験しない者にこそ快し」(月村辰雄訳)、二宮敬『人類の知的遺産23 エラスムス』、講談社、1984年、337頁。

8 同上、342頁。

9 エラスムス「キリスト者の君主の教育」(片山英男訳)、『宗教改革著作集2 エラスムス』(金子晴勇、木ノ脇悦郎、片山英男訳)、教文館、1989年、375頁。

10 エラスムス『平和の訴え』(箕輪三郎訳)、岩波文庫、1961年、76頁。

神の剣でこれらを抹殺してから、真のキリスト教的精神を再発見しよう。そして必要とあらば、キリストの旗のもとに、生身のトルコ人に向かって進軍し、キリストを擁護者として、彼らを打ち負かそう。[中略]

しかしながら、トルコ人たちを殺戮する代わりに、礼拝と信仰の連帯のなかで彼らを我々に結びつけるなら、この勝利はキリストにとり最も受け入れられるものとなるだろう。[中略] 我々の王国ではなくキリストの王国を拡大することを我々の唯一の目標、主要な関心事としよう¹¹。

このようにオスマン帝国に対する戦争に限定を加えるエラスムスの姿勢が、帝国への敵対的言説が西欧キリスト教世界に流布していた当時においてはきわめて平和主義的であったのは確かである¹²。その一方で、オスマン帝国という現実の存在を理解し解釈するさいも、また帝国の脅威に対する解決策を見出そうとするさいも、エラスムスが宗教的文脈のなかでのみ思考しているという点を指摘しておく必要がある。

エラスムスはトルコ人のキリスト教化という理念を論じるさい、オスマン帝国の国家機構や軍事機構、オスマン社会の内実に大きな関心を示すことはなかった¹³。内面的革新を果たしたキリスト教徒が福音を伝えさえすればトルコ人がキリスト教に改宗する道は開け、キリスト教世界に対するオスマン帝国の脅威という問題は解決に向かうと彼は楽観的に考えていた。先述の『戦争は体験しない者にこそ快し』のなかで彼は言う。

もし言葉が通じないのであれば、福音にふさわしい行動をもって彼ら〔トルコ人〕と接することにしよう。そうすれば彼らと理解しあえるであろう。人の生きる態度もまた、雄弁に物語るものである。知識をひけらかすことなく、単純でまことに使徒の名に恥じぬ信仰告白をもって、彼らに接することにしよう。一方、新約と旧約と両聖書によって明白に示されたあの美德を、彼らから期待することにしよう。そうすれば、交わす言葉の数は僅かであっても和合はいともたやすく成立し、また、多くの場合について頑なに

11 Desiderius Erasmus, “A Most Useful Discussion Concerning Proposals for War against the Turks, Including an Exposition of Psalm 28 (Utilissima consultatio de bello Turcis inferendo, et obiter enarratus psalmus 28)”, tr. Michael J. Heath, in Dominic Baker-Smith (ed.), *Collected Works of Erasmus, Vol. 64: Expositions of the Psalms*, Toronto: University of Toronto Press, 2005, p. 242.

12 ルネサンス期の西欧キリスト教世界に流布した、オスマン帝国に関する言説——そこでは好戦的な敵対感情が支配的であった——を扱った重要な研究書として、Robert Schwoebel, *The Shadow of the Crescent: The Renaissance Image of the Turk (1453–1517)*, New York: St. Martin’s Press, 2nd ed., 1969 (1st ed., 1967) および Nancy Bisaha, *Creating East and West: Renaissance Humanists and the Ottoman Turks*, Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2004が挙げられる（エラスムスの例外性に関しては、後者の pp. 174–175に言及がある）。

13 Housley, *op.cit.*, pp. 272–273.

ならず、おたがいが意見の自由を保持すれば、両者の協調は長く保持されるであろう¹⁴。

キリスト教倫理を説いた代表作『エンキリディオ』(*Enchiridion*, 初版1504年)の新版の序文として付された1518年の「ヴォルツ宛の手紙」(“*Epistola ad Paulum Volzium*”)においてもエラスムスは言う。

トルコ人を征服する最も効果的な方法は次のような場合であったことでしょう。すなわち、それは私たちが彼ら自身の帝国を欲しがらない、彼らのお金を渴望していない、彼らの所有物を獲得しようとししないで、彼らの救いとキリストの栄光のほか全く何も求めていないことを彼らが知るようになった場合です¹⁵。

そして仮にやむなくトルコ人と戦場で対峙するときも、勝利を左右するのは戦術云々ではなく、キリスト教徒と神のあいだの関係のみである。『トルコ人に対しなされるべき戦争に関するきわめて有益な議論』でエラスムスは言う。「神が我々に味方してくださなければ、勝利はほとんど期待できないということを私は認める。主の恩恵を得るために我々が努力したならば、1万の軍勢に対し我々が百しかいなくても、勝利は我々のものだ」¹⁶。

エラスムスのこのようなトルコ人キリスト教化論は、一方で、単純かつ抽象化されたトルコ人のイメージを内包している。なぜなら、トルコ人は本来的にキリスト教徒より宗教的倫理的に低い次元にあり、キリスト教の福音によって救済されるべきであり、また彼ら自身もイスラームに完全に満足しているわけではないという暗黙の前提を、彼のトルコ人教化論に読み取ることができるからである。じっさい、キリスト教徒の内面の罪をトルコ人になぞらえた『トルコ人に対しなされるべき戦争に関するきわめて有益な議論』の先ほど引用した一節や、キリスト教徒が憎悪や支配欲からトルコ人に戦争を仕掛ければ、トルコ人と同等ないしそれ以下に自らを貶めてしまうという彼のしばしば使う論理に、トルコ人を本来的にキリスト教徒より劣った存在とみなす意識が垣間見える。後者に関して、再び『戦争は体験しない者にこそ快し』を引用しよう。「だが、現今では、邪悪な者に対して戦う時、私たちがまた邪悪な者となりはてているではないか。キリスト教徒を名乗り十字架を押し立ててはいるものの、極言するなら、私たちはトルコ人になりさがってトルコ人と戦っているのではない

14 エラスムス「戦争は体験しない者にこそ快し」(月村辰雄訳)、343頁。

15 エラスムス「ヴォルツ宛の手紙」(金子晴勇訳)、『宗教改革著作集2 エラスムス』、187頁。

16 Erasmus, “A Most Useful Discussion Concerning Proposals for War against the Turks...”, p. 260.

か」¹⁷。

3. アルフォンソ・デ・バルデスの『メルクリウスとカロンの対話』のオスマン帝国観

では、アルフォンソ・デ・バルデスの『メルクリウスとカロンの対話』に話を移そう。

アルフォンソ・デ・バルデスは、皇帝カール5世の宮廷のラテン語尚書係、皇帝の実質上の秘書官として、政治・外交の様々な局面で活躍しつつ、文筆業にも手を染めた。彼はエラスムス本人と文通による親交があり、その宗教思想だけでなく政治論、君主論、平和論にも強く共鳴し、キリスト教世界全体のユートピア的改革を夢見ていた¹⁸。それを対話という文学的技巧によって表現したのが、『ローマで生じた諸事件に関する対話』(*Diálogo de las cosas acaecidas en Roma*)¹⁹と、今回取り上げる『メルクリウスとカロンの対話』の2編である。

バルデスが活躍したのは1520年代半ばから死に至るまでの時期であるが、それはちょうど、スレイマン大帝(1世、在位1520-1566)統治下のオスマン帝国がハンガリーに進出し、カール5世の弟でオーストリアを治めていたフェルディナンド(オーストリア大公として在位1526-1564。のち神聖ローマ皇帝として在位1556-1564)を脅かした時期でもある。外交文書を扱う立場にあり、かつヨーロッパ中に幅広い人脈を持っていたバルデスは、オスマン帝国をめぐるそうした情勢に精通していたはずである。しかし一方で、強大なオスマン帝国とトルコ人にキリスト教世界がどう向き合うべきかという問題に関して、1529年のウィーン包囲の前後に執筆した『メルクリウスとカロンの対話』のなかでバルデスが示す態度は、同じくオスマン帝国の脅威を強く意識しつつも、政治論や平和論を扱った様々な著作や書簡のなかでトルコ人との戦争に厳しい制約を加え続けたエラスムスのそれに、非常に近いと言える。

『メルクリウスとカロンの対話』は、メルクリウス(ローマ神話の商業神で、死者の魂を導く役目も与えられた)とカロン(ギリシア神話に登場する、冥界の河の渡し守)が冥界の入り口で作品執筆当時のヨーロッパ情勢を論じつつ、地獄または天国へ向かう様々な靈魂を呼びとめ、生前の行いを問いただすという設定の対話篇であるが、まったく対照的な二人の君主の霊を交えた対話のなかに、前節でまとめた、オスマン帝国に関するエラスムスの基本

17 エラスムス「戦争は体験しない者にこそ快し」(月村辰雄訳)、338頁。

18 アルフォンソ・デ・バルデスの生涯に関する詳細は、Rosa Navarro Durán, “Introducción”, in Alfonso de Valdés, *Diálogo de las cosas acaecidas en Roma*, Madrid: Cátedra, 1992, pp. 11-19を参照。思想の全体像に関しては、Bataillon, *op.cit.*, pp. 364-404; Abellán, *op.cit.*, pp. 126-134が詳しい。

19 皇帝カール5世の軍隊によるローマ略奪(1527年)を弁護するために『メルクリウスとカロンの対話』と同時期に書かれ、やはり作者の没後に刊行された。

的な考え方から直接に影響を受けていると思われる記述が現れる。

まず、バルデスの考える君主の理想の対極に位置する、虚偽悪徳に満ちた統治をおこなったキリスト教徒の暴君の霊が、地獄に向かう途中にメルクリウスとカロンに呼び止められる。この君主は生前トルコ人に領土欲と盲目的な憎悪から戦争を仕掛けた経験があり、それをめぐってカロンと次のような会話を交わす。

カロン [前略] あんたにはわからなかったのか、トルコ人に害をなせばなすほど、彼らはイエス・キリストにより大きな憎悪を抱き、自らの考えにますます固執するということが？

霊 じゃあ連中をどのような方法でキリスト教徒にすべきだったというのかね？

カロン もしあんたが自分の領国を平和平穏のうちにしっかり治め、かつあんたとあんたの臣民が良きキリスト教徒として生きているという前提があったなら、そのときこそ、トルコ人をキリスト教に改宗させることから始めるべきだった。イエスキリストの教えを説いた使徒たちがそうしたように、愛によって彼らを信仰に引き付けるため、彼らに対し善行を施して。そうしたあとで、もし愛によってでは彼らが改宗を望まず、力づくで改宗させることがキリストの名誉にかなうと思われるならば、そのときはそれを実行すべきだった。しかしあくまで慎重に、自分たちが攻撃されているのは略奪や支配のためではなく、ただ彼らの精神的な救いのみのためであると、トルコ人たちがわかるようなやり方で。(DMC, p. 155)²⁰

そして最後にカロンは結論づける。「ほかの方法では、トルコ人たちをキリスト教徒にする以前に、あんたたちがトルコ人以下の存在になってしまうだろう」(DMC, p. 155)。

作品の別の箇所では、理想の善政を施し天国へ上る、ポリドーロ (Polidoro) というキリスト教君主の霊が現れる。バルデスが傾倒したエラスムスの政治論『キリスト者の君主の教育』(前節参照)の理念の体現者でもある²¹この人物は、自分の生前、その善政の噂を聞いた他国の数多くのムスリムが、武力による征服を伴うことなく、自発的に彼を君主として受け入れ、キリスト教に改宗したと次のように語る。

多くの領邦が、モーロ人やトルコ人のそれもキリスト教徒のそれも、自分たちを臣下と

20 参照・引用にあたり使用した版は、Alfonso de Valdés, *Diálogo de Mercurio y Carón*, ed. Rosa Navarro Durán, Madrid: Cátedra, 1999である。引用箇所を示すさいはDMCという略称を用い、論文筆者による日本語訳の直後に(DMC, ページ数)で該当ページ数を示す。[]は論文筆者による補足を示す。

21 Navarro Durán, ed., *Diálogo de Mercurio y Carón*, p. 214, n. 31.

して受け入れてほしい、我々はどんなことがあろうとあなたに忠実に仕えそして従う、と私に使者を送って願いを伝えてきた。そして数多くの異教徒たちが、私の臣民たちにまじって生活するうちに、キリスト教徒になることを望み、自発的に洗礼を受けるに至った。(DMC, p. 220)

またこの理想君主の霊は、自分が死の直前に息子に残した遺訓をメルクリウスとカロンに紹介するが、そのなかに次のようなくだりがある。

異教徒に対しては戦争に訴えねばならない、そうしなければ彼らはキリスト教徒を奴隷にし、拷問によって聖なるカトリック信仰から背教させるだろうし、そればかりか、キリスト教世界を破壊し、キリストの寺院を冒瀆し、その聖なる名前を地上から消し去ってしまうだろう。しかしお前の個人的利益や野心のために彼らに戦争を仕掛けることなど考えてはいけない。そのように異教徒に仕掛ける戦争には、恐ろしい毒が潜んでいる。そして彼らを征服したあとは、何よりも、良き行いによって、彼らをキリストの信仰に改宗させるよう努めなさい。もしお前とお前の臣民が異教徒以下の行いをしていたら、どのような顔をして彼らにキリスト教徒になるよう勧めることができようか？ もしお前とお前の臣民にキリスト教の美德が輝くのが見えれば、モーロ人やトルコ人を征服するのに大きく寄与するだろう。(DMC, p. 230)

以上引用した箇所から、次のことが言えよう。アルフォンソ・デ・バルデスのオスマン帝国観がエラスムスとまったく同じとは言えないのは確かである。キリスト教徒の側からトルコ人に仕掛ける戦争を肯定している点で、対オスマン戦を自衛の枠内にとどめることにこだわったエラスムスとのあいだに差異がある。だが、オスマン帝国との戦争に関して、宗教的・倫理的観点から厳しい制限を加え、領土獲得や政治的支配を目的とした戦争を否定し、トルコ人のキリスト教化という理念を掲げている点では、エラスムスの宗教的理想主義から深い影響を受けていると言える。

またバルデスの考えるトルコ人キリスト教化論は、あくまでキリスト教徒の内面によって規定されるという点でも、エラスムスと共通性を持っている。ポルドーロの善政によってムスリムの自発的改宗が生じたという説明、そして彼が息子に遺した「もしお前とお前の臣民にキリスト教の美德が輝くのが見えれば、モーロ人やトルコ人を征服するのに大きく寄与するだろう」という言葉は、キリスト教徒が本来の倫理的模範性を回復すれば、トルコ人はそれに魅了されるはずだ、そしてトルコ人の改宗つまり精神的征服へと自然に結びつくはずだ、というエラスムスと同様の楽観論を表している。

そしてバルデスのこのような楽観的なトルコ人キリスト教化論もまた、エラスムスのそれと同様、宗教的・倫理的文脈のなかでトルコ人を単純化し、本来的にキリスト教徒に劣る存在として彼らを位置づけている。先ほど引用した、「もしお前とお前の臣民が異教徒以下の行いをしていたら、どのような顔をして彼らにキリスト教徒になるよう勧めることができようか？」という理想君主ポリドーロの言葉、そして「トルコ人をキリスト教徒にする以前に、あんたたちがトルコ人以下の存在になってしまうだろう」と暴君の霊を叱るカロンの言葉が、それを示している。そこにあるのは、トルコ人はイスラームという「劣った宗教」に満足しているはずはなく、「よりすぐれた」キリスト教への改宗へと説得可能だという空想的な前提であって、現実のオスマン帝国のムスリム住民への深い関心ではない。

4. 『トルコへの旅』のオスマン帝国観

それでは次に、『トルコへの旅』について考察したい。先述のように、この作者不詳の対話篇の執筆時期は1550年代後半、すなわちアルフォンソ・デ・バルデスの『メルクリウスとカロンの対話』から約四半世紀後と考えられている。アドリア海でオスマン海軍に捕らえられたのち、スレイマン大帝統治下のイスタンブルに連行され、そこで医者の仕事を始め、大宰相リュステム・パシャの兄弟シナン・パシャの侍医として活躍したのち脱走し、スペインに帰国したペドロ・デ・ウルデマラス (Pedro de Urdemalas) という人物が、聖地サンティアゴ・デ・コンポステーラへの巡礼の途上二人の旧友と再会し、オスマン帝国での見聞について語るという設定の作品である。

この作品は聖遺物崇拜の行き過ぎなどカトリック信仰の形骸化を批判し内面的信仰を称揚しており、キリスト教改革思想の面ではエラスムス主義の系譜のうえに位置づけられる²²。しかしながら、オスマン帝国に対する見方は、バルデス及び彼に深い影響を与えたエラスムスのそれとは異質である。

『トルコへの旅』はオスマン帝国を記述することをメインテーマとしており、帝国に関する情報量は当然、アルフォンソ・デ・バルデスの対話篇とは比べものにならない。だがそれだけでなく、オスマン帝国に対する見方も根本的に異なっている点が重要である。

まず指摘しなければならないのが、トルコ人の精神的救済すなわちキリスト教化が彼らに対して許される戦争の唯一の目的であるという考え方が、『トルコへの旅』においては姿を消していることである。この作品は主君にあてた冒頭の「献辞」のなかでも、対話本編のなかでも、各所でオスマン帝国に対する戦いを呼びかけているが、戦争目的をトルコ人のキリ

22 この点に関する詳細は、Bataillon, *op.cit.*, pp. 684-692および Abellán, *op.cit.*, pp. 239-244に譲る。

スト教化に限定しようという考えはみられない。

作品が主張するキリスト教信仰の刷新も、トルコ人の平和的なキリスト教化と結びつくものとは考えられていない。自らの内面を清め倫理的模範となったキリスト教徒が愛によってトルコ人を教化するという理念は、この作品のどこにも見出すことができない。少なくともその点に関しては、エラスムスからの影響はきわめて希薄である。

むしろ、信仰のみならず政治・軍事を含めた社会全体の刷新によってオスマン帝国に対抗できるようキリスト教諸国の国力を増すことに作者の関心は置かれていると言える²³。こうした関心は、たとえば、オスマン軍とキリスト教世界の軍隊を対比する次のような箇所に見出すことができる。

ベドロ 彼らは剣、弓、銃そして矛を持たせれば、ほかのどんな軍隊にもいない精強な兵士たちだ。そして私が思うに、服従と、安楽におぼれないことだけが、彼らを精強にしている。

マタ [対話者の一人] 私への愛にかけて、われわれの兵士たちに言ってくれよ。寝床で寝るな、哀れな宿の主から盗んだり力づくで奪ったりできるんだろが、自分で金を払ってないのに鶏を食うのはやめろ、金曜ならなおさらだ。そして娼婦を連れて歩くなど。(VdT, pp. 705-707)²⁴

さらに重要な点は、『トルコへの旅』が、エラスムスの影響を受けたバルデスとは異なるコンテクストのなかでオスマン帝国を理解しようとしている、そしてその脅威への対処のあり方を模索しているということである。この対話篇においては、オスマン帝国に言及するさい、宗教的視点は消滅はしないものの後退し、オスマン帝国はキリスト教世界とりわけスペインとの関係のなかで、より世俗的かつ現実的な、政治的・軍事的対立というコンテクストのなかに第一義的に位置づけられている。トルコ人は、キリスト教の福音によって精神的に救済されるのをただ待っているという、宗教的次元のなかで理念化、単純化された存在ではもはやなく、スペインと覇権を争う大帝国の建設者として描かれている。

たとえば、最新の世界地図を前にして、ベドロ・デ・ウルデマラスとリュステム・パシャがカール5世の帝国とオスマン帝国の領土の広さを比較する興味深い場面は、スペインの政治的・軍事的敵対者として位置づけられたオスマン帝国のイメージを象徴的に浮かび上ら

23 この問題に関しては、三倉康博『『トルコへの旅』におけるオスマン帝国のイメージ』、『HISPÁNICA』第49号、2005年、135-149頁（特に142-144頁）で詳しく分析している。

24 参照・引用にあたり使用した版は、『Viaje de Turquía』, ed. Marie-Sol Ortola, Madrid: Castalia, 2000である。引用箇所を示すさいは VdT という略称を用い、論文筆者による日本語訳の直後に (VdT, ページ数) で該当ページ数を示す。[] は論文筆者による補足を示す。

せる。そしてこの場面にみられる、スペインとオスマン帝国のあいだで支配領域の広さを競う意識は、オスマン帝国との関係を領土の獲得や政治支配という観点からとらえることに對しきわめて批判的、否定的だったエラスムスやバルデスとは相容れないものでもある。

私は彼 [リュステム] に言った。「では閣下にお教えいたしますが、皇帝 [カール5世] はフランス王と大トルコ [スルタン]²⁵を合わせたよりも強大です。彼が持つ領土の最小の部分がスペイン、ドイツ、イタリア、フランドルだからです。じっさいにご覧になりたければ、世界地図を持ってこさせてください」。[中略] 地図が届くと、私は彼にコンパスを使ってトルコ [スルタン] が支配する領域すべてを測らせた。それはインディアス [新大陸] に及ばず [中略] 彼はとても驚いた。(VdT, pp. 354–356)

『トルコへの旅』がオスマン帝国の宗教的多元性にしばしば言及し、それが帝国の繁栄に寄与していることを指摘するのも、この対話篇がより現実政治的な文脈のなかでオスマン帝国を理解し、その強大さの秘密を探ろうとしているからだと考えられる。ある箇所では、国内で宗教的多元性を認めないスペインの現状と対比しつつ、経済的利益を重視する立場から宗教的多元性を維持しているオスマン帝国の社会システムについて友人たちに説明し、それを肯定的に評価している。オスマン帝国の宗教的多元性に対するそのような見方は、この作品の作者が、唯一絶対の信仰のもとにすべての人間を包摂するという理念から離れたところに位置していることを示している。

ベドロ トルコと呼ばれているからといって、全住民がトルコ人だというわけではない。信仰を守って暮らしているキリスト教徒はトルコ人より多いのだ。

マタ ではトルコ [スルタン] はなぜ彼らの存在を認めているのかね？

ベドロ 租税さえ払うのなら、それがユダヤ人だろうとキリスト教徒だろうとモーロ人だろうと、彼にはどうでもいいことじゃないか。スペインにだって、昔はモーロ人やユダヤ人がいたじゃないか。(VdT, pp. 451–452)

このようにオスマン帝国、トルコ人をより現実的な、非宗教的な視点からみている『トルコへの旅』の作者にとって、オスマン帝国の脅威という問題を解決するために最も重要なのは、エラスムスやバルデスの考え方とは異なり、キリスト教徒の内面や、キリスト教徒と神との関係ではない。もちろん『トルコへの旅』の作者も、キリスト教社会の改革を望んでい

25 16–17世紀のスペイン語文献では、オスマン帝国のスルタンは「スルタン」ではなく「大トルコ(人)」(Gran Turco)あるいは単に「トルコ(人)」(Turco)と呼ばれることが多い。

るが、それだけでオスマン帝国からキリスト教世界を防衛することが可能になるとは考えていない。オスマン帝国に対抗するには、何よりもまず、オスマン帝国の内実そのもの、その長所と弱点を具体的に知らなければならないというのが、この対話篇の根底に一貫する思考であり、また作品の執筆目的の一つだとも言える。たとえば対話のなかでペドロは、オスマン帝国の軍隊に関する正確な情報の必要性を次のように強調し、情報不足がキリスト教世界の今までの敗北の原因であると指摘している。

もしわれらの不敗の皇帝陛下 [カール 5 世] がこの軍勢 [オスマン軍] に向かって出陣する余裕があれば、相手が連れている人数の十分の一の手勢だけで、狼の歯をへし折ることができるだろう。しかし近隣での戦争に足をとられて陛下が望みを実現できず、また向こうへ渡った者たちが何もわからずに送ってくる馬鹿げた情報のせいで我々が臆病になり意気阻喪してしまうので、トルコ人は勇気を得て勝利を重ねるのだ。我々が抱く恐怖が、彼らを勇者にしているのだ。(VdT, p. 712)

5. 相違の背景にあるもの

以上のように、キリスト教改革思想の面ではエラスムス主義の系譜のうえにともに位置づけられるアルフォンソ・デ・バルデスの『メルクリウスとカロンの対話』と作者不詳の『トルコへの旅』を比較すると、エラスムスのオスマン帝国観がバルデスに深い影響を与えている一方、『トルコへの旅』にその痕跡はまったくと言ってよいほどみられない。

では、オスマン帝国への見方に関して 2 作品のあいだにみられる相違は、何に起因するのだろうか。バルデスがエラスムス本人とも個人的親交を持ち、また彼が活躍した時期がまさにスペイン・エラスムス主義の最盛期に一致したのに対し、『トルコへの旅』はエラスムスの死後、しかもスペインにおけるエラスムスのブームがかなり下火になってから書かれている。『トルコへの旅』がエラスムスのキリスト教改革思想から影響を受けつつも、彼のオスマン帝国観を受け継いでいないという点は、エラスムスの受容をめぐるそうした状況の変化と無関係ではないだろう。しかし問題をそれだけに還元することはできないと思われる。

ここで重要な点として指摘したいのは、スペインとオスマン帝国の関係の緊迫である。アルフォンソ・デ・バルデスの死から『トルコへの旅』が書かれるまでのあいだに、地中海の各地で、スペインとオスマン帝国は激しい抗争を繰り返すようになった。大部分がオスマン帝国の勢力圏内に入った北アフリカは対立の焦点の一つであり、カール 5 世の 2 度の北アフリカ遠征 (1535年のチュニス遠征と1541年のアルジェ遠征) もこの時期に行われている。そのような対立のなかで、オスマン帝国はスペインの最大の宿敵とみなされるようになり、

またオスマン帝国に捕われ、虜囚として地中海各地——とりわけ北アフリカの諸都市——に連行された無数の兵士や民間人の存在は、スペイン社会の各層にとって深刻な問題となっていく²⁶。こうした時代背景ゆえ、オスマン帝国とトルコ人が、スペインと政治的・軍事的な覇権を争う現実の敵として、『トルコへの旅』の作者の前に浮かび上がったと考えることができる。エラスムスやバルデスのような、抽象的・単純なオスマン帝国観、トルコ人観を維持することがもはや困難な歴史的状況が出現したとも言えるだろう。冒頭の「献辞」や対話本編のなかで、『トルコへの旅』の作者はしばしば、虜囚たちの苦難を強調しその救済を呼びかけているが²⁷、それは上記のような時代背景とこの作品のかかわりをよく示している。

そしてこのように地中海で衝突する現実の敵としてオスマン帝国がスペインの前に出現したとき、スペインの作家たちがオスマン帝国を記述するさいのモデルとなったのが、イタリア諸邦の作家たちの著作であった²⁸。15世紀後半以降のイタリア諸邦では、オスマン帝国の西方進出を契機として、帝国の政治・社会面への関心が増し、それに伴って、従来宗教的視点からの記述と解釈が中心であったムスリム・イメージの世俗化、複雑化が進んだ²⁹。スペイン人作家たちは、それらイタリア人のオスマン帝国記述から大きな刺激と影響を受け、1540年代に入ると自らの手で、オスマン帝国を同様の現実的・世俗的視点から詳細に記述するようになる³⁰。『トルコへの旅』もその系譜のうえに位置づけることができるだろう。じっ

26 詳細は、Ellen G. Friedman, *Spanish Captives in North Africa in the Early Modern Age*, Madison: The University of Wisconsin Press, 1983 に譲る。

27 たとえば主君にあてた「献辞」で作者は次のように述べている。「私は陛下のために、対話の形をとったこの論述書において、陛下の敵の力、生活、起源、および習慣、そして哀れな虜囚たちが過ごしている生活を目の当たりに描き出し、陛下がそのよき目的を追求する一助となるようつとめたのです」(VdT, pp. 160–161)。また対話本編のなかでペドロ・デ・ウルデマラスは、対話相手がヴェネツィアやフィレンツェ出身のイスタンブル居留民について「彼らは虜囚たちに何か善行をするのかい？」(VdT, p. 783)と尋ねるのに対し、次のように答え、彼らがキリスト教徒虜囚の解放に協力しないと糾弾している。「彼らは善行をほどこすよりむしろ害をなしている。[中略]鎖につながれた者を見れば逃げ出して、言葉もかけない。こちらから身請けのために送金しても、横領してそれを商売に使う」(VdT, p. 783)。

28 Bunes Ibarra, *op.cit.*, pp. 6–7.

29 この点は、Nancy Bisaha, *op.cit.* に詳しい。

30 じっさい、初期近代スペインを代表するオスマン帝国関連文献の多くが、1540・50年代に出版ないし執筆された。人文主義者ペドロ・メヒア (Pedro Mexía, 1497–1551) が1540年にセビーリャで初版を上梓し好評を博した、多様な学問知識の集成『森羅渉獵』(*Silva de varia lección*) では、オスマン帝国とトルコ人に関し多くのページが費やされている。1547年には印刷業者兼作家のバスコ・ディアス・タンコ (Vasco Díaz Tanco, c.1490–c.1560) の『忌まわしく残忍な民トルコ人に関し語られてきたことの集成』(*Libro intitulado Palinodia, de la nephanda y fiera nacion de los turcos*) がオレンセで出版され、1556年にはバレンシアでビセンテ・ロカ (Vicente Rocca, 生没年不詳) の『トルコ人の起源と数々の戦争の歴史』(*Hystoria en la qual se trata de la origen y guerras que han tenido los Turcos*) が刊行された。また同時代に刊行はされなかったが、カール5世時代のスペインを代表する歴史家フランシスコ・ロベス・デ・ゴマラ (Francisco López de Gómara, 1511–66) が、スレイマン大帝に仕えてアルジェを拠点にキリスト教徒に対する私掠活動をおこなった海の冒険者ハイレットイン・バルバロス (1466?/83?–1546) とその兄の伝記『バルバロッサ』

さい、この作品の作者が先行する作家たちのオスマン帝国に関する著作を参照していたこと、その中心がイタリア人の著作であったことは、すでに研究によって明らかにされており³¹、彼らの新しい視点から影響を受けたことは十分考えられる。『メルクリウスとカロンの対話』と『トルコへの旅』のあいだの差異は、以上のような政治的・文化的な大きな変動と関連づけることが可能だと思われる。

6. 結 び

これまでみてきたように、スペイン・エラスムス主義文学を代表する存在とされるアルフォンソ・デ・バルデスの『メルクリウスとカロンの対話』と、エラスムス主義文学の最後を飾る作者不詳の『トルコへの旅』のあいだには、オスマン帝国への見方に関して、大きな差異がある。アルフォンソ・デ・バルデスがエラスムスの多分に理念的・宗教理想主義的なオスマン帝国観をおおむね忠実に継承したのに対し、その四半世紀後、『トルコへの旅』の作者は、エラスムス的なキリスト教改革の夢は維持しつつも、新たな政治的・文化的状況のなかで、オスマン帝国に関してはより現実的な、そしてより複雑な見方を示した。エラスムスの思想がスペインに及ぼした影響の全体像、その影響の及んだ範囲を考えるさい、この点は新たな光を投げかけるものと思われる。

参 考 文 献

- Abellán, José Luis, *El erasmismo español*, Madrid: Gráficos Espejo, 1976. Madrid: Espasa-Calpe, 3ª ed., 2005.
 Bataillon, Marcel, *Erasmus y España. Estudios sobre la historia espiritual del siglo XVI*, tr. Antonio Alatorre, 2 vols., México D.F.: FCE, 1950. 2ª ed. corregida y aumentada, 1966 (1ª ed. en francés, 1937).
 ———, *Le docteur Laguna auteur du «Voyage en Turquie»*, Paris: Librairie de Éditions Espagnoles, 1958.
 Bisaha, Nancy, *Creating East and West: Renaissance Humanists and the Ottoman Turks*, Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2004.
 Bunes Ibarra, Miguel Ángel de, *La imagen de los musulmanes y del Norte de África en la España de los siglos XVI y XVII. Los caracteres de una hostilidad*, Madrid: CSIC, 1989.

兄弟年代記』（*Crónica de los Barbarroja*）を1540年代に執筆している。またイタリアの人文主義者・歴史家パオロ・ジョヴィオ（Paolo Giovio, 1483-1552）が著わし西欧諸国語に訳された『トルコ人の事績に関する覚書』（*Commentario de le cose de' Turchi*）のスペイン語訳も、1543年に刊行されている。

- 31 マルセル・バタイヨンがこの点を最初に指摘した（Bataillon, *Erasmus y España*, pp. 672-673; *Le Docteur Laguna auteur du «Voyage en Turquie»*, Paris: Librairie de Éditions Espagnoles, 1958, pp. 70-79）。その後アルベール・マス、アンナ・コルシ・プロスペリがより詳細な研究をおこなった（Mas, *op.cit.*, I, pp. 135-149; Anna Corsi Prosperi, “Sulle fonti del «Viage de Turquía»”, *Critica Storica*, 14 (1977), pp. 66-90）。本稿で使用した『トルコへの旅』の校訂版の編者オルトラもこの問題に関し緻密な検証をおこなっており、先行文献に明らかに依拠している箇所、依拠した可能性のある箇所をすべて脚注で指摘している。

- Corsi Prosperi, Anna, “Sulle fonti del «Viaje de Turquía»”, *Critica Storica*, 14 (1977), pp. 66–90.
- Cytowska, Maria, “Erasmе et les turcs”, *Eos*, 62 (1974), pp. 311–321.
- Erasmus, Desiderius, “A Most Useful Discussion Concerning Proposals for War against the Turks, Including an Exposition of Psalm 28 (Utilissima consultatio de bello Turcis inferendo, et obiter enarratus psalmus 28)”, tr. Michael J. Heath, in Dominic Baker-Smith (ed.), *Collected Works of Erasmus, Vol. 64: Expositions of the Psalms*, Toronto: University of Toronto Press, 2005, pp. 201–266.
- Friedman, Ellen G., *Spanish Captives in North Africa in the Early Modern Age*, Madison: The University of Wisconsin Press, 1983.
- Housley, Norman, “A Necessary Evil? Erasmus, the Crusade, and War against the Turks”, in John France and William G. Zajac (eds.), *The Crusades and Their Sources: Essays Presented to Bernard Hamilton*, Aldershot: Ashgate, 1998, pp. 259–279.
- Margolin, Jean-Claude, “Erasmе et la guerre contre les turcs”, *Il pensiero politico*, 13 (1980), pp. 3–38.
- Mas, Albert, *Les turcs dans la littérature espagnole du Siècle d’Or (recherches sur l’évolution d’un thème littéraire)*, 2 vols, Paris: Centre de Recherches Hispaniques, 1967.
- Navarro Durán, Rosa, “Introducción”, in Alfonso de Valdés, *Diálogo de las cosas acaecidas en Roma*, Madrid: Cátedra, 1992, pp. 11–55.
- Schwoebel, Robert, *The Shadow of the Crescent: The Renaissance Image of the Turk (1453–1517)*, New York: St. Martin’s Press, 1967. 2nd ed., 1969.
- Valdés, Alfonso de, *Diálogo de Mercurio y Carón*, ed. Rosa Navarro Durán, Madrid: Cátedra, 1999.
- Viaje de Turquía*, ed. Marie-Sol Ortola, Madrid: Castalia, 2000.
- エラスムス, デシデリウス 『平和の訴え』 (箕輪三郎訳), 岩波文庫, 1961年。
- 「ヴォルツ宛の手紙」 (金子晴勇訳), 『宗教改革著作集 2 エラスムス』 (金子晴勇, 木ノ脇悦郎, 片山英男訳), 教文館, 1989年, 183–208頁。
- 「キリスト者の君主の教育」 (片山英男訳), 『宗教改革著作集 2 エラスムス』 (金子晴勇, 木ノ脇悦郎, 片山英男訳), 教文館, 1989年, 263–376頁。
- 「戦争は体験しない者にこそ快し」 (月村辰雄訳), 二宮敬『人類の知的遺産23 エラスムス』, 講談社, 1984年, 291–357頁。
- 三倉康博 「『トルコへの旅』におけるオスマン帝国のイメージ」, 『HISPÁNICA』 第49号, 2005年, 135–149頁。

Summary

Spanish Erasmism and the Ottoman Empire:
Focusing on Two Sixteenth-Century Dialogues

Yasuhiro MIKURA

This study analyzes how Spanish Erasmians of the sixteenth century viewed the Ottoman Empire, focusing on two dialogues of the age: Alfonso de Valdés' *Diálogo de Mercurio y Carón* (*Dialogue of Mercury and Caron*), written in 1528–1530, and the anonymous *Viaje de Turquía* (*Voyage to Turkey*), written in the latter half of the 1550's.

In the *Diálogo de Mercurio y Carón*, Valdés, accepting Erasmus' pacifism, limits the legitimate purpose of the war against the Turks to their Christianization and expects that the Turks will convert to Christianity voluntarily if they see the pure faith of the Christians. In doing so, he shows, like Erasmus, a scarce interest in the real Turks and simplifies them by placing them in a religious context only.

In contrast, the *Viaje de Turquía*, which is scarcely influenced by Erasmus' pacifism, makes no mention of any such unrealistic Christianization of the Turks. This dialogue situates the Ottoman Empire in political and military context and argues that to confront the Ottoman menace, it is necessary to understand the Turks as they really are.

Two reasons will be presented for the distinct views of the Ottoman Empire given by these authors. First, while Valdés was a friend and contemporary of Erasmus, writing at the height of Spanish Erasmism, the author of the *Viaje* wrote it after Erasmus' death, during the decline of Spanish Erasmism. Second and more important, it seems that the author of the *Viaje*, conscious of the deepening Ottoman menace against Spain and influenced by Italian authors, viewed the Ottoman Empire in a more realistic and complicated way.